

中央構造線①南朝と修験者

三遠南信地区の急峻な山里には、隠れ里・落人の村が多い。修験者も多く移り住んだ。

都落ち 南朝皇子

豊根村富山に残る『田辺氏家伝年代記』によれば、熊野別当の子孫は、南北朝争乱期に南朝の皇子「大塔宮護良親王」と行動を共にし、奥三河へたどり着き開郷したという。

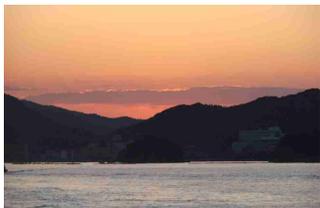
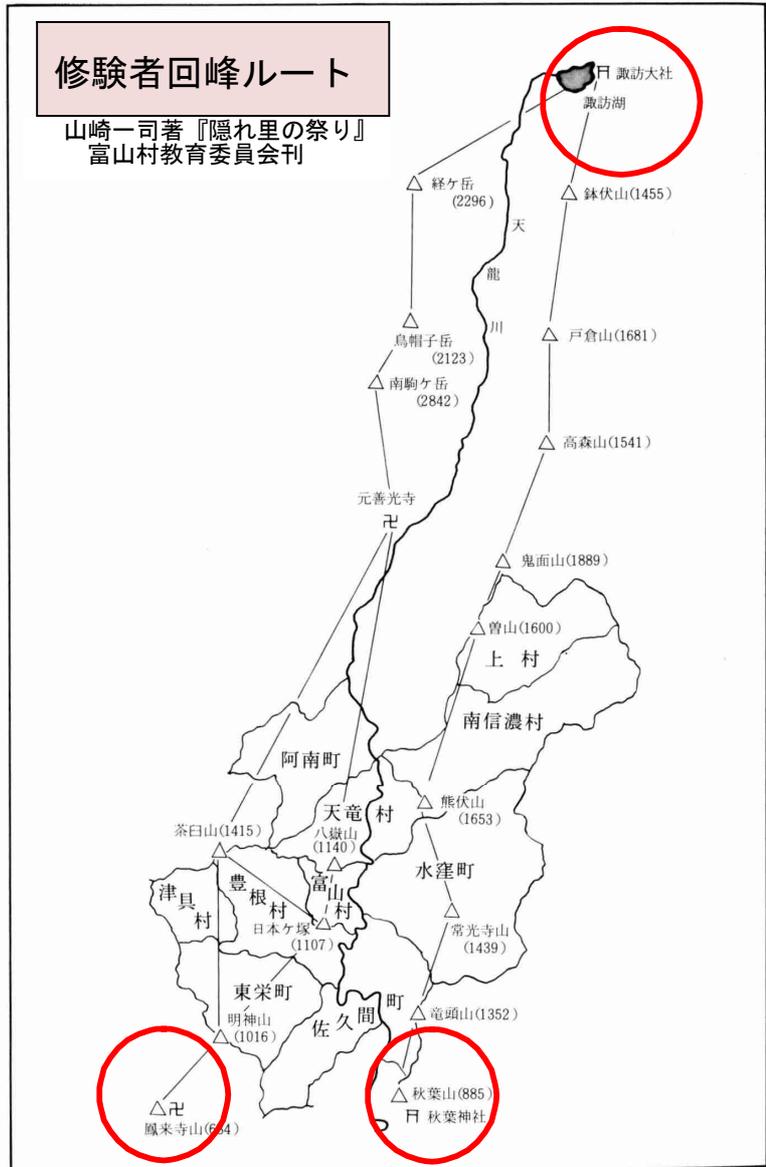
三遠南信地域には、南朝の皇子や天皇の話が多い。

豊橋市石巻山近く、神郷地区にある広福寺は「玉川御所」といわれ、長慶天皇の仮御所となったこともあるという。

遠州では、井伊谷宮「宗良親王」の話。さらに、信州阿智村での尹良親王親子の自刃。南朝哀史が豊富な地であった。

南朝を支えた財力

南朝方の伊勢の北畠氏は、伊勢の山中（現松阪市）で南朝を支えた。軍資金は、紀伊半島・中央構造線上に豊富に産出した辰砂（水銀朱）であった。水銀朱は、鍍金用・朱塗りの魔除け・薬などに利用。櫛田川・紀の川の水運を通して流通した。



鳥羽の海。海を渡って続いている中央構造線

修験者のネットワーク 新田義貞挙兵を一夜で伝達

山を介した修験者のネットワークが、南朝の皇子や南朝方を支えたともいわれている。『太平記』に、新田義貞挙兵のニュースは一夜にして日本各地に伝わったという。修験者の面目躍如である。

中央構造線を熟知 修験者修行回峰ルート

三遠南信地域への伊勢からの流れは、中央構造線の流れに沿って自然であった。さらに、三河の鳳来寺山・遠州の秋葉山。信州の諏訪大社を結ぶ線は、修験道の修行コースであった。

中央構造線とは？

日本で最も長い (約 1,000km)断層

水平に何百kmも、すれ動いています。

そのために、すれた所では岩が砕かれて弱くなり谷や峠となっています。

このあたりでは、諏訪湖の近くの杖突峠より、赤石山脈の西のへりを通り、分杭峠・地藏峠・青崩峠と南下し、天竜川とは佐久間町中部でぶつかり、東三河に入って豊川の谷をつくっています。

紀伊半島では紀ノ川、四国では吉野川をつくり、九州の八代へと続きます。

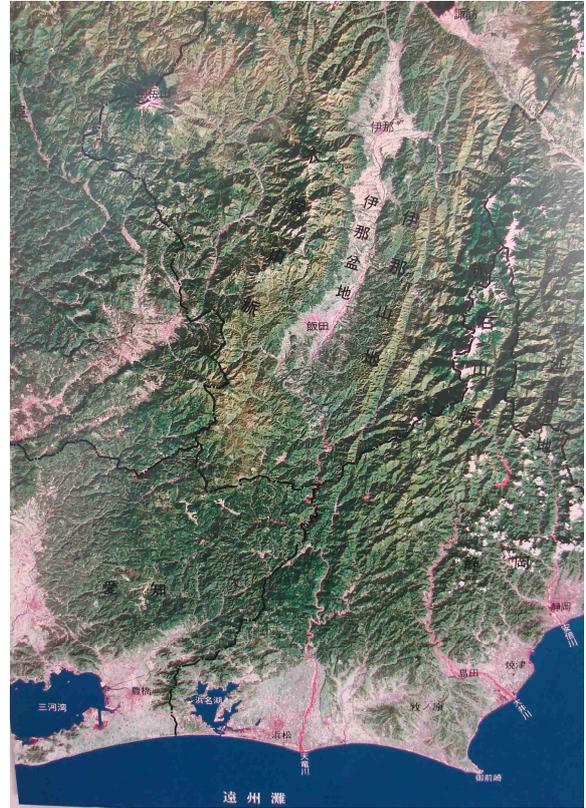
最初にこの大断層を指摘したのは、ドイツから日本に地学の先生として来日したナウマン(1883)で、ナウマン象にも名を残しています。

この大断層をはさんで、北側には高温低圧でできた岩(領家変成帯)、南側には低温高圧でできた岩(三波川変成帯)が分布しています。

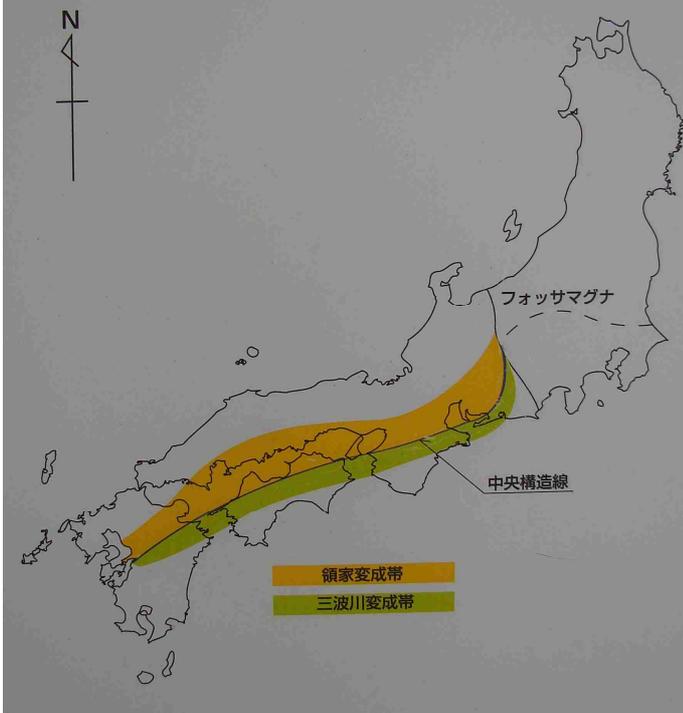
中央構造線は、日本列島と深いかかわりを持ち、多くの研究者がその謎とときに挑戦しています。

中央構造線②

日本一長い断層

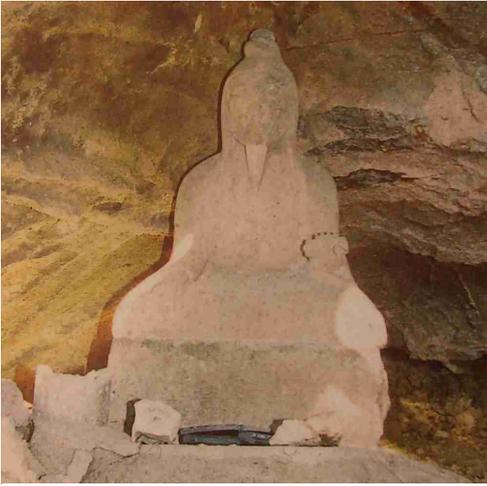


中央構造線の位置



中央構造線説明板：鳳来寺山自然科学博物館蔵





利修仙人：鳳来寺山自然科学博物館提供

中央構造線③鳳来寺山

鳳来寺は「利修仙人」によって奈良期に開山された。「仙人」が「開山」した寺は、全国的にも珍しい。

赤・青・黒の3鬼を従え、空を飛び、天皇の病を病氣治癒の術で直したという。

3鬼と鳳来寺田楽

利修仙人入定時、鳳来寺を守るため3鬼は首を切られ、本堂下に埋められた。



「行者帰りの岩」：「行者越え」「行者返し」ともいう。利修仙人を訪ねてきた「役行者」が険しくて登れなかったという。修行の無事を祈り、16羅漢が彫られている。鳳来寺山自然科学博物館提供

国指定重要無形民俗文化財『三河田楽』の一つ「鳳来寺田楽」は、作物の豊作と、利修仙人の家来であった3鬼の慰霊から始められたという。

鳳来寺本堂下の石櫃発見 金文字の「鬼骨入」

昭和48年鳳来寺本堂再建時、旧本堂下から石櫃を掘り出した。金文字で「鬼骨入」とあり。中に、頭骸骨。伝説の3鬼が、俄然真実味を帯びてきた。骨は、2体。哺乳類のものという。

鳳来寺の薬草と修験

かつて鳳来寺山で「弘法大師相伝『御夢想胃腸御符』三河鳳来寺松高院」謹製の胃腸薬を販売。苦いが、効果てきめん。『御夢想胃腸御符』は、鳳来寺山の豊かな植生から生み出された薬であった。御岳『百草丸』・伊勢『萬金丹』など修験者がらみの薬が多い。修験者は、生活に必要なものを山から調達した。薬草はその一端であった。

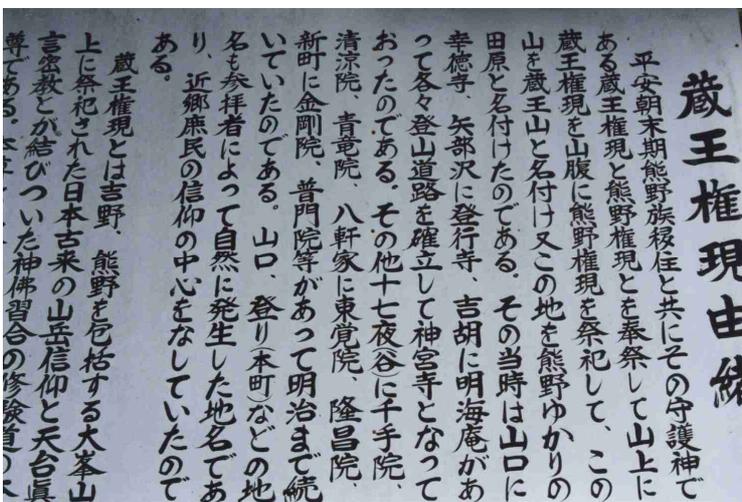
仙人 行者 修験者と中央構造線

「仙人」「行者」「修験者」は、ほぼ同一に使われる。「修行」し、「験」を得たものは、さまざまな術を遣い空も飛べる。不老長寿にもなるなどといわれる。「仙人」はすでに「験」を得た人。「行者」は「修験の行」をする人をさす。

修験道を築いた役行者・鳳来寺の利修仙人・高野山の真言密教の空海、伝説に満ちた修行と生活に金・水銀・中央構造線が関わってくる。

奥三河を走る中央構造線近くに大

小の鉾山が点在する。なぜか？



上：田原市蔵王山の『蔵王権現由緒』修験者は、「蔵王権現」「明神」を守護神とした。
右：石巻山、修験道の山であった。本宮山も同様。



中央構造線④空海は行く

中央構造線は、九州から本州までのびる大きな断層である。その中央構造線を歩き回ったのが空海である。

遍路で有名な「四国八十八か所」。中央構造線に沿って空海由来の真言密教の寺と鉱山がある。空海の右手の錫杖しやくじょうは、鉱山師の持つ錫杖と同じという。

空海にゅう しんしゃ 丹生しんしゃ (辰砂・水銀朱) 金

高野山開山にあたり、空海を導いたのが「丹生都比売にゅうつひめ」。丹生は「辰砂」。辰砂は「水銀朱」といわれ、水銀の原料である。紀伊半島には、丹生のつく名が多い。

高野山は「金山」と言われている。修験者の霊山吉野大峯山は、別名「金の御峯」。吉野山自体も金山と伝えられている。なぜ、「金」の山を修行の場としたのか？

不老長寿の薬・丹生しんしゃ (水銀朱) 金

金の出るところに水銀は必ずあるという。反対に、水銀のあるところに必ず金があるとはいえない。

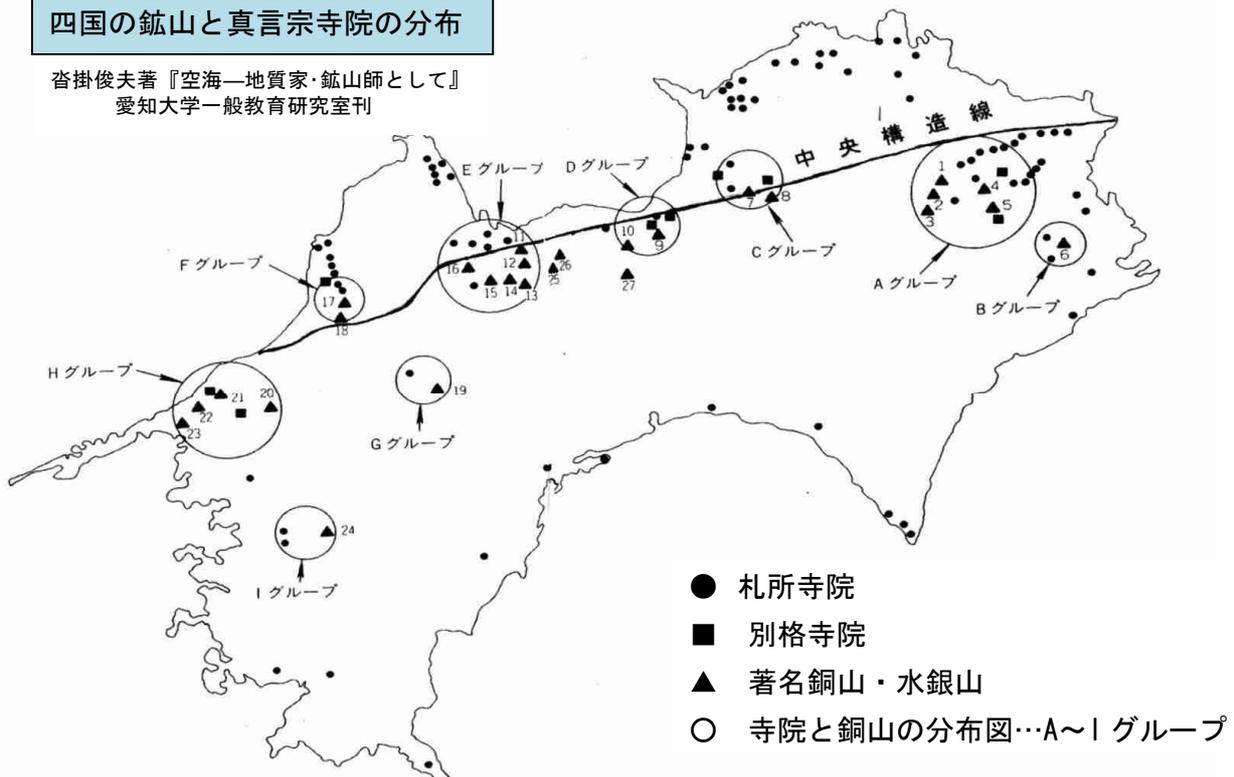
修験者たちは、不老不死の薬・錬金術的存在「丹生(辰砂・水銀)」を求めて、山に入った。山のどこに行けば、どんな薬草があるか。どこに辰砂があるか。各所を歩いた結果、断層部に注目した。中央構造線である。



松阪市『丹生大師』の弘法大師（空海）像と同所にある丹生神社由来

四国の鉱山と真言宗寺院の分布

沓掛俊夫著『空海—地質家・鉱山師として』
愛知大学一般教育研究室刊



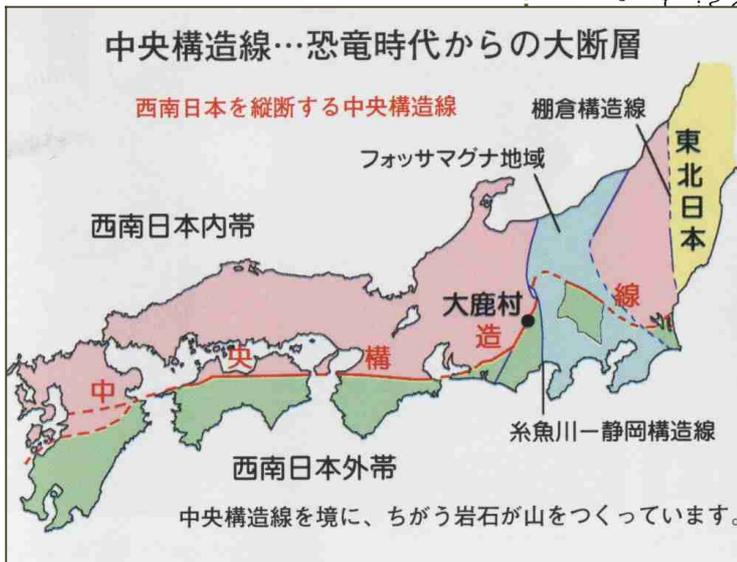
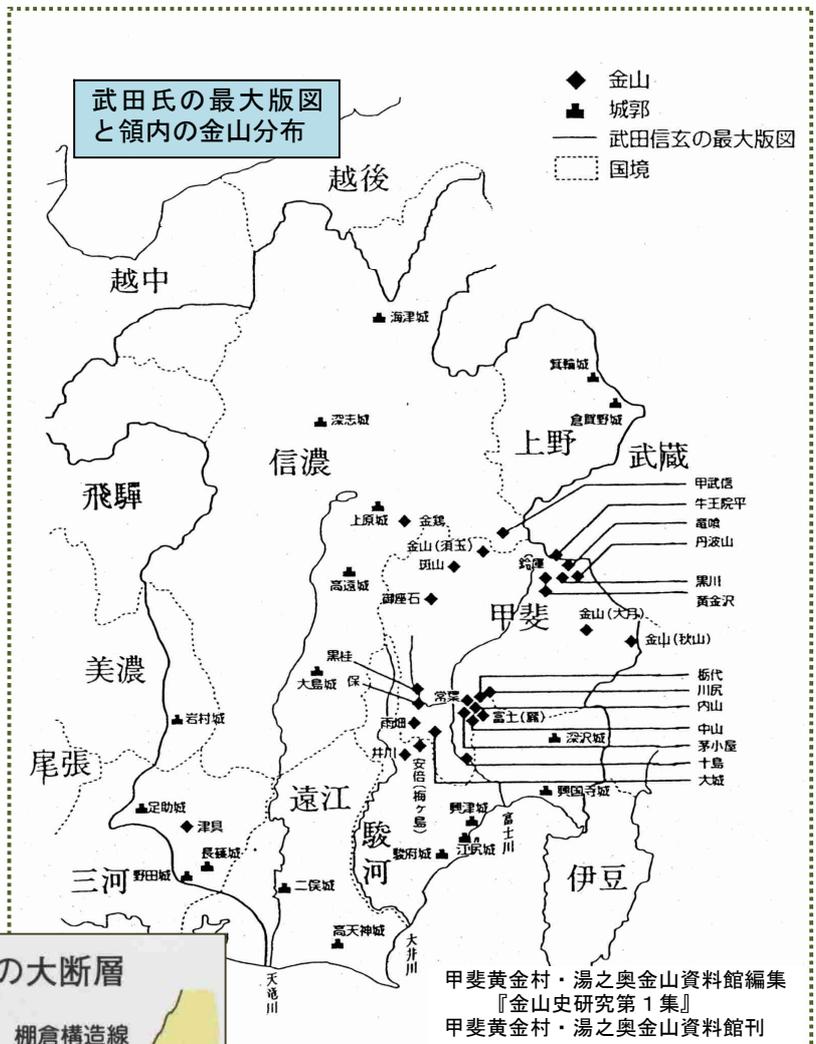
中央構造線⑤金

中央構造線という断層をはさんで領家帯(花崗岩帯)と三波川帯(緑色片岩帯)に分かれる。

フォッサマグナと金山

フォッサマグナ地域と武田氏領有の金山群とが重なる。山を熟知していた修験者は、同じ断層部や火山の石がみられる地域に狙いを定めた。

武田金山衆の一人大久保長安は、武田氏滅亡後、家康に仕え、フォッサマグナ地域の伊豆で金山を開発した。



大鹿村中央構造線博物館パンフレット

中央構造線と津具金山

中央構造線上の水銀・金を求めて、修験者は三遠南信地域へ修行と教を兼ねて入山。修験の「火伏せの行」と鉱石精錬とのつながり、修験者は、鉱山師・土木技術者の顔も持つ

三遠南信各地域に、鉱山の神、「金山彦命」「金山荒神」が祀られている。

武田氏が奥三河を治めていた時代に津具で金山が発見された。



対岸から見た長篠城

長篠合戦と金山衆

長篠城は天然の要害といわれている。中央構造線近くに建てられたため、その活動の影響を受けた三波川帯の緑色片岩は、破碎作用を受けて脆くなっている。

長篠合戦の時、武田金山衆が攻撃用に横坑を掘っても、緑色片岩の岩のために、すぐ崩れたという。

中央構造線⑥即身仏 行人様」・水銀

『熊谷家伝記』には、修験者に関する興味深い話が多い。修験者に連れられて熊野詣の途中拾った鉄砲の話。修験者が名主になった話。即身仏の話などがある。



行人山から見た新野高原「千石平」

即身仏 行人様」

長野県阿南町新野高原を見下ろすところに行人山がある。即身仏「行人様」の舞台である。

修験道は、肉体と魂は別物と教える。故に、修行を積めば、体は滅んでも魂は永遠に残るといふ。実行したのが行人様である。

ミイラは語る! 五穀断ち^{もくじき} 木食^{にゅうじょう}の行

五穀を断ち、山に大きな穴を掘り、中で入定。行人山には、即身仏「行人様」のミイラが安置されている。

高温湿潤な日本の気候にミイラ化は難しい。問題は、なぜミイラ化したかである。季節も影響する。高い山に北風吹きすさぶ冬なれば、乾燥度も上がる。が、それだけともいえない。

行人様は、死ぬまで脂肪分をとらなかつたため、筋肉はカチカチに固まり、腐敗もせず自然にミイラになった。生前、体内から腐敗物を取り除き入定する^{もくじきぎょう}木食行のすさまじさを語る。

日本の多くの即身仏は、五穀断ちをした後、松の葉や草を煮炊きせずに食し体を軽くした。わずかでも水銀含有の地ならば、食物と共に体に自然に蓄積され、腐敗防止になったと思われる。

魔除けの水銀朱 水銀は富と権力のしるし

水銀は使い方を誤れば毒になる。しかし、古来から辰砂・水銀朱は、魔除けとして使われた。さらに、鍍金用^{めつき}・防腐剤・薬・化粧品・顔料などに使用。平安後期に書かれた『新猿楽記』には、中国への大切な輸出品とある。

松田寿男著『古代の朱』に、古代日本は水銀大国であったと記載。装飾古墳の朱、宮殿寺院の朱柱・奈良の大仏の鍍金^{めつき}・朱漆など。「黄金千杯、朱千杯」といわれ、富と権力のしるしであった。

能面に施されたわずかな水銀。薪能の薄暗い舞台に幽玄な^{おもむ}趣きをそえる。水銀の持つ魅力を日本人は知り、活用していた。

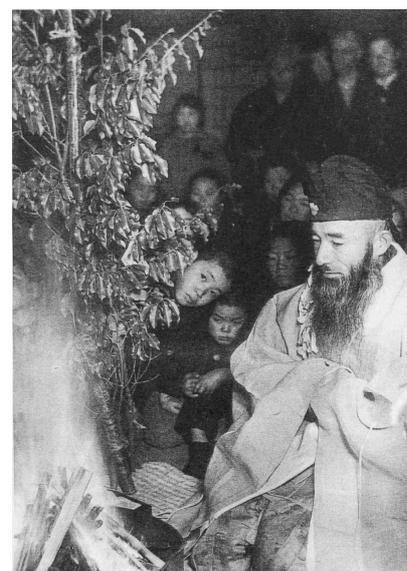
「金のあるところ水銀あり」を知っていた修験者たちは、山で修行しながら、役立つ鉱物や薬草を探索した。



即身仏「行人様」: 行人様奉賛会著『行人さま』行人様奉賛会刊



「行人様ご開帳と大煙火大会」看板: 今も慕われている行人様。「鉄下駄駅伝レース」もあり。新野高原道の駅



昭和の行者、疫病神や風邪神を払う護摩を焚く: 熊谷元一氏撮影『故郷の昭和史』岩波書店刊